

【論文】

宮沢賢治文学における地学的想像力（七）

基礎編…「〔地質調査ルートマップ〕」の検証（その一）

―「五間ヶ森」とその周辺―

鈴木健司

本稿は「宮沢賢治文学における地学的想像力」というテーマの下に企図された、連作論文の一つである。これまで、（一）「基礎編・珪化木（Ⅰ）及び瑪瑙」（文学部紀要）文教大学文学部第21・2号）、（二）「基礎編・珪化木（Ⅱ）」（言語文化）第20号、文教大学言語文化研究所）、（三）「基礎編・（ま）い淵」と（豊沢川の石）」（注文の多い土佐料理店）第12号、高知大学宮沢賢治研究会）、（四）「応用編・檜ノ木大学士と蛋白石、発展編・ジャータカと地学」（文学部紀要）文教大学文学部第22・1号）、（五）「応用編・修羅意識と中生代白亜紀」（文学部紀要）文教大学文学部第22・2号）、（六）「応用編・第三紀泥岩と影一朔太郎の不安との類似性」（文教大学国文）第38号）を発表している。

本稿の目的は、「地質調査ルートマップ」に関し、特に賢治作品と深いかわりを持つ「五間ヶ森」とその周辺地域の調査結果を報告し、賢治作品の読解に不可欠な基礎的資料を新たに提示するところにある。

キーワード：宮沢賢治、地学、ルートマップ、五間ヶ森、松倉山

一 「地質調査ルートマップ」とは

「地質調査ルートマップ」(図版ページ参照)

は、『新校本宮沢賢治全集』第十四巻「雑纂」に、カラー口絵写真のかたちで収められている。また、同巻の「校異」篇をみると、次のように記されている。

《用紙》 五万分一地形図「新町(秋田四号)」(陸

地測量部発行) 一枚

《筆記具》 ブルーブラックインク(文字の記入のみ)・水彩絵具

《補説》 本稿は、「巖手県稗貫郡地質及土性調査報告書」のための実地踏査中(大正六年五月以降)に作成されたものとみられる(本文篇四五頁および「校異」参照)。

本稿に使用された地形図は図郭外の部分を切り取り、十六折にされている(野外携行用によく行われる措置)。この地形図の初版は大正五年三月三十日発行(黒一色刷)。なお、「新町」図幅は「花巻」の西に

隣接するもので、本稿の部分は稗貫郡の西北端にあたる。地形図の全体を次に掲出するが、口絵写真に示した部分以外には賢治の記入はない。

「地質調査ルートマップ」は、「校異」《補説》に記されているように、「巖手県稗貫郡地質及土性調査報告書」(以下「報告書」と記す)作成のため、実地踏査の段階で作られたと考えて間違いはない。そもそも「報告書」とは、大正六年三月、稗貫郡長より盛岡高等農林学校教授・関豊太郎に、稗貫郡の地質及土性に関する調査の囑託があり、約四年後の大正十一年一月に完成、稗貫郡長に提出されたものである。作成にあたり関教授は、実地踏査を伴うその仕事の補助者として、神野生馬(農学科第二部助教授)、宮沢賢治(当時三学年在籍)に依頼した。賢治は「報告書」の完成のため、卒業後も研究生として残ることになった。「報告書」には稗貫郡長の「序」と関豊太郎の「序言」が付されているが、稗貫郡長の「序」からは、「報告書」の作成の意義・必要性を知ることができる。また、関豊太郎の「序言」からは、「報告書」がどのように

して作成されたか、特に、賢治がいかに重要な役割を担っていたかを知ることができる。賢治に関する箇所のみ「序言」から、次に引用する。

大正六年三月稗貫郡長葛博士ヨリ公務ノ余暇ヲ以テ数年ヲ期シテ郡内ノ地質及土性ヲ調査シ農事改良ニ資セムトスルノ希望ヲ容レ、其年四月囑托ヲ承ケ之ト同時ニ農学得業士神野幾馬及宮沢賢治ノ両氏調査員トシテ囑託セラレ著者ノ事業ヲ幫助スルコト、ナレリ。宮沢氏ハ同年五月以降洽ク郡内山野ヲ跋涉シ、桔据勉強同年ノ終ニ至リテ地質図ヲ完成スルニ至レリ、著者ハ自己ノ踏査セル結果ニ照ラシ多少之ニ補修ヲ加ヘタリ、而シテ宮沢氏ノ觀察ト著者実地ニ視察セル事実トニ基キ本郡地形及地質ニ関スル記事ヲ編成シ之ヲ報文ノ第一章トナセリ。

(後略)

大正十一年一月

東京市外西ヶ原ノ寓居ニ於テ

農学博士 関 豊太郎

神野幾馬への囑託は助教であるから当然としても、宮沢賢治は三学年に在籍中であり、異例の抜擢といつてよいだろう。賢治が書いたとされる「報告書」第一章「地形及地質」を読むと、地質学に関する賢治の知見が明らかとなる。ここでは、後の論の展開に直結する第一章第二節「岩石及地質系統」第二項「火成岩」の「三、流紋岩」の記述を引用する。

三、流紋岩（酸性火山岩） 本岩ハ一ニ石英粗面岩ト称シ微細ナル斜長石及石英ヨリ成レル灰白色淡黄色乃至淡赤色ノ石基中ニ細カキ石英ノ斑晶ヲ散点シ、破面ハ粗糙ナルヲ常トスレトモ時ニ頗ル緻密ナルモノアリ、屢其岩漿タリシ際ニ流動シタル紋理即チ流紋ヲ現ハス之レ流紋岩ト呼ハル、所以ナリ、往々岩石ノ小腔中ニ細キ石英ノ結晶ヲ群生ス、本岩ハ第三紀ニ迸発シタルモノニシテ一時其噴火ノ頗ル隆盛ナリシハ其凝灰岩ノ分布広大ナルニヨリテ推知スルヲ得ヘシ、流紋岩ハ西部丘陵地ノ諸所ニ露出シ其顯著ナルモノハ大森山及五間森ニシテ其玻璃状変種タル真珠岩及松脂岩ヲ伴フ。

稗貫郡での流紋岩の分布は「西部丘陵地ノ諸所」であるとし、顕著なものとして「大森山」と「五間ヶ森」を挙げ、流紋岩の「玻璃状変種」である「真珠岩」や「松脂岩」も見出せるとしている。「西部丘陵地ノ諸所」とは豊沢川中流域を指す。同地域における他の例を挙げれば、鉛温泉近くの「高倉山」や「江釣子森山」も流紋岩からできているとされる。

賢治の死後ただ一枚残された「地質調査ルートマップ」は、この付近を調査対象としたものである。「五間ヶ森」の箇所を見ると、流紋岩を意味する「Lip」(Liparite・リバライトの略)の記述を確認できる。賢治は、まず大沢川の上流域に入り、川筋を下りながら、その足で「五間ヶ森」に向かい「五間ヶ森」の中腹を南から北にめぐり、「下し沢」を経由し、県道(花巻大曲線)へ抜けたものと思われる。

その間の標本番号を確認すると30〜36が「大沢川」、37・39が「五間ヶ森」、38は「五間ヶ森」を越えた峠道、42が「下し沢」である。40・41は飛び番となっているが、理由は不明である。この地域は矢櫃層(湯

口層)とよばれる新第三紀中新世の凝灰岩が基盤となっており、下部には男助層(凝灰岩)がある。それらを買いて流紋岩のマグマが噴出し山を成している。また大沢川上流は、大石層(凝灰岩)、さらに大石層下位の大荒沢層(幕館層)(凝灰岩)にかかっており、安山岩マグマの噴出がいたるところにあり、複雑な岩石分布を呈している。30〜35はAnd (andesite・安山岩)(写真1)、36はConglomerate (礫岩)質のTuft(凝灰岩)(写真2)、37・39はLip (Liparite・流紋岩)(写真3・4)で、38は判読しにくい英語だが、おそらくはTuft (Pumiceous)で、浮石質凝灰岩(写真5)のことだろう。42はLip (Liparite・流紋岩)(写真6)である。

「五間ヶ森」中腹に黒曜岩を意味するObs. (Obsidian)の記述が見え注目されるが、同地点から黒曜岩を確認することはできなかった。ただ、「下し沢」の上流部で真珠岩の大きな貫入露頭が確認できた(写真7)。そこは、「五間ヶ森」の山裾ともいえる場所で、貫入方角は、「五間ヶ森」の山塊に向かっていて。また「下し沢」の転石の中に真珠岩を幾つも見出すことができ(写真8)。賢治は先の「報告書」で「其玻璃状変

種タル真珠岩及松脂岩ヲ伴フ」と記述している。黒曜岩と真珠岩はともに流紋岩の仲間であるが、非常に近い関係にあり、賢治は黒曜岩と真珠岩とを同義語的に用いている可能性がある。「下シ沢」の真珠岩は、九州大学・理学研究院・地球惑星科学部門の上原誠一郎先生の鑑定では、真珠岩に似ているが黒曜岩と判断すべきとのことであった。私の採取した真珠岩（または黒曜岩）は、賢治が「〔地質調査ルートマップ〕」上に記した地点とは異なる場所からの産出で直接的な証拠とはならないが、賢治が「下シ沢」を下りる際に真珠岩の露頭を見た可能性も高く、全くの無関係とは思われない。

というのも、「〔地質調査ルートマップ〕」上の「Obs.」には標本採取番号がなく、本当に賢治がその地点で黒曜岩を見たのかどうかの確証がない。さらに、観察したかぎりでは、賢治が記述した付近からの黒曜岩（または真珠岩）の産出は、ほとんど可能性がないと私は判断している。したがって、「下シ沢」（「五間ヶ森」の山裾）の黒曜岩（または真珠岩）と、「〔地質調査ルートマップ〕」上「五間ヶ森」中腹に書き込まれた

黒曜岩とは、何らかの繋がりがあってもいいかもしれないと推定することは可能である。ただ現時点では、調査報告としてとどめておきたい。

また、「五間ヶ森」の流紋岩には二種類あり、目のギッシリと詰まったものと、そろばん玉型の空隙を持ったものが確認できる。後者は、比較的新しい噴火の際に形成されたものと推定され、空隙のなかに玉随の埋まっていたあとを示すものも採取できた（写真9）。蛋白石の充填されていた可能性もないわけではないと思われる。

蛋白石との関連でいうなら、「下シ沢」の調査中、流紋岩の転石に蛋白石を発見することができた（写真10）。同質の流紋岩を求め沢を遡ると、高倉山方面から下シ沢に流れ込む北ノ又沢で再度蛋白石を見つけることができた。「下シ沢」で採取された蛋白石は株式会社ニチカに分析を委託、X線回折分析の結果として蛋白石であることが確認されている。蛋白石は、賢治作品を読み解く上でのキーワードの一つであり、「台」の万寿山での蛋白石の確認（「応用編・植ノ木大学士と蛋白石」参照）とともに、意義あることと考

えている。

二 詩「風景とオルゴール」・「風と偏奇」

詩集『春と修羅』（第一集）「風景とオルゴール」という作品があるが、この作品の舞台は、おそらく実在する「五間ヶ森」とその周辺地域である。

爽かなくだものにほひに充ち
つめたくされた銀製の薄明穹を

雲がどんどんかけてゐる

黒曜こくようひのきやサイプレスの中を

一疋の馬がゆつくりやつてくる

ひとりの農夫が乗つてゐる

もちろん農夫はからだ半分ぐらゐる

木こだちやそこらの銀のアトムに溶け

またじぶんでも溶けてもいいとおもひながら

あたまの大きな曖昧な馬といつしよにゆつくり

くる

首を垂れておとなしくがさがさした南部馬

黒く巨きな松倉山のこつちに

一点のダアリア複合体

その電燈の企画プランなら

じつに九月の寶石である

その電燈の献策者けんさくしやに

わたくしは青い蕃茄とまを贈る

どんなにこれらのぬれたみちや

クレオソートを塗つたばかりのらんかんや

電線も二本にせものの虚無きよむのなかから光つてゐるし

るし

風景が深く透明にされたかわからない

下では水がごうごう流れて行き

薄明穹の爽かな銀と苹果とを

黒白鳥のむな毛の塊が奔り

（ああ お月さまが出てゐます）

ほんたうに鋭い秋の粉や

玻璃末はりまの雲の稜に磨かれて

紫磨銀彩しませんさいに尖つて光る六日の月

橋のらんかんには雨粒がまだいっぱいついてゐる

なんとといふこのなつかしきの湧きあがり

水はおとなしい膠朧体だし

わたくしはこんな過透明な景色のなかに

松倉山や五間森荒つばい石英安山岩の岩頸から
放たれた剽悍な刺客に

暗殺されてもいいのです

(たしかにわたくしがその木をきつたのだから)

(杉のいただきは黒くそらの椀を刺し)

風が口笛をはんぶんちぎって持つてくれれば

(気の毒な二重感覚の機関)

わたくしは古い印度の青草をみる

崖にぶつつかるそのへんの水は

葱のやうに横に外れてゐる

そんなに風はうまく拭き

半月の表面はきれいに吹きはらはれた

だからわたくしの洋傘は

しばらくばたばた言つてから

ぬれた橋板に倒れたのだ

松倉山松倉山尖つてまつ暗な悪魔蒼鉛の空に立

ち

電燈はよほど熟してゐる

風がもうこれつきり吹けば

まさしく吹いて来る劫のはじめの風

ひとときれそらにうかが暁のモテイフ

電線と恐ろしい玉髓の雲のきれ

そこから見当のつかない大きな青い星がうかぶ

(何べんの恋の償ひだ)

そんな恐ろしいがまいるの雲と

わたくしの上着はひるがへり

(オルゴールをかけるかけろ)

月はいきなり二つになり

盲ひた黒い暈をつくつて光面を過ぎる雲の一群

(しづまれしづまれ五間森)

木をきられてもしづまるのだ)

作品舞台は、志度平温泉と大沢温泉とのほぼ中間地

点で、豊沢川に架かっている渡橋(現在の渡温泉付

近)に、賢治は立っていると推定される。

(渡り)にお住まいの畠山幸二郎さん(昭和八年生

まれ）のお話では、「橋板」と記されていることに關し、渡橋はかつては板でできていたということである。当時は花巻市街と鉛温泉を結ぶ花巻電気鉄道・鉛線（軌道式）が走っており、渡橋は、橋脚として石を積みコンクリートで固めたものが用いられ、電気鉄道は橋の片側につくられた鉄製の橋板の上を運行していたという。夜間運転も行っていたということである。

『写真集』栄光の軌道花巻電鉄』（著者・佐々木幸夫、発行者・花巻電鉄OB会会長小田島勝見、熊谷出版印刷部、平元・3）を見ると、渡り橋上を通過中の軌道敷電車の写真も収録されており、細部は不分明であるが、おおよそ、畠山氏の証言と一致している。

そのような前提で詩の解釈を試みるなら、「オルゴール」という表現は、軌道式電車に電気を送るために立てられた電柱（同電柱には家庭用の電線も敷設されていた）の電線に強い風が吹きつけ、うなりを立てているようすを暗喩として表現したものと考えられる。また、「一点のダリア複合体」と描写された「電燈」は、畠山氏の記憶では（渡り）駅は無人駅で、電柱に電灯が付けられていたということであり、その

電燈を指していると考えてよいのではないだろうか。賢治は、駅名でいえば（志度平温泉）から（渡り）を経て（大沢温泉）方面に歩いていたらと推定される。進行方向の後ろに「松倉山」（写真11）があり、前方左手奥に「五間森」（「五間ヶ森」写真12）があることになる。同日の日付をもつ詩「昴」から、帰途は電車に乗ったことが分かる。

花巻電気軌道設立は、一九一三年（大正二年）であるが、一時に全線が開通したわけではない。馬車鉄道の区間もあり、一九二三年（大正一二年）五月に志戸平温泉と湯口（大沢温泉）間の電車運転が開業されている。賢治の詩の日付はわずかその四ヶ月後である。なお、大沢温泉と西鉛温泉間は当時まだ馬車鉄道で、電化は大正一四年まで待たねばならなかった。

さて、「五間森」や「松倉山」が「石英安山岩」と記述されていることは、大きな謎である。すでに確認したように、賢治は「五間ヶ森」を「（地質調査ルー）トマップ」上で流紋岩と記述しており、詩において「石英安山岩」と記したことの合理的理由を見出すことができないからである。後に詳述するが「松倉山」

も「石英安山岩^{デキサイト}」ではない。それ故、あえていうなら、賢治には「五間森」や「松倉山」を「岩頸」と捉えた内的理由があり、そのために「石英安山岩」としたのかもしれないということである。

「岩頸」と「石英安山岩」との組み合わせは、賢治の場合、沼森（散文「沼森」）や南昌山（短歌No. 240）のような例がある。この場合も、沼森や南昌山が石英安山岩だと保障されているわけではない。用例として存在しているということである。また、実際の「五間森」や「松倉山」を見るかぎり、「岩頸」の表現があまり当てはまらない山といわざるをえない。「五間ヶ森」は山頂が平らで「岩頸」のイメージに合わない。「松倉山」も（渡り）側から見れば山容は「岩頸」と呼べそうだが、別の角度から見た場合横に細長く（写真13）、やはり「岩頸」のイメージにはつながらない。このような実際と詩の表現との食い違いをどのように解釈すべきか。単純に賢治の記憶違いということでは済まずべきではないだろう。おそらくこの種の問題は、詩をさらに深く読み込んで行く過程で、自ずと賢治の意図したことが理解されるのではないかと予想されるが、本

稿の目的からはずれるので、別稿の課題としてとどめおくことにする。

「風景とオルゴール」と同日の日付（一九二三・九・一六）をもつ詩「風の偏奇」も、舞台は同じである。

おゝ私のうしろの松倉山には

用意された一万の珪化流紋凝灰岩の弾塊があり

川尻断層のときから息を殺してしまつてゐて

私が腕時計を光らし過ぎれば落ちてくる

空気の透明度は水よりも強く

松倉山から生えた木は

敬虔に天に祈つてゐる

この作品で賢治は「松倉山」を「珪化流紋凝灰岩」とよんでいる。「風景とオルゴール」では「石英安山岩^{デキサイト}」であった。現在流布している地質図（内外地図株式会社発行・著作権所有者：長谷地質調査事務所、昭55・9）では「流紋岩」の山とも解釈できるので、まずは、実際の岩石が何であるのか確認しておく必要があるだろう。「松倉山」を調査してみると、賢治のいう「珪

「流紋凝灰岩」の正しいことが分かる。「松倉山」は細長い山であり、場合によっては流紋岩から成る場所があることも考えられるが、私が調査した数箇所（沢や尾根）でのサンプル採取の結果は、ほとんどが凝灰岩と判断できるものであった（写真14・15）。泥岩層などの混じることも確認できた。

次に「川尻断層」の語だが、原子朗著『新宮沢賢治語彙辞典』（東京書籍、99・7）でも解説されているように、一八九六年（明治29年）八月三日におきた陸羽地震によって和賀郡湯田村（現・西和賀町川尻）に生じた断層のことである。『岩手百科事典』（岩手放送、53・10）によれば、マグニチュード七・五と推定され、県内の死者四人、全壊家屋一一〇ということである。なお、秋田県側の被害は岩手県の被害をはるかに上回るものであったとも記されている。

賢治は「珪化流紋凝灰岩」を「用意された一万の「弾塊」と記している（写真16）。詩の解釈としては、陸羽地震により「松倉山」の珪化流紋凝灰岩に無数の罅が入ったと読めるが、それが事実と異なることを賢治は承知していたはずである。凝灰岩の隙間

には所によって水晶が発達しており（写真17）、火山灰が海底に積もって地下深く沈んでいた頃からの罅であることを示している。賢治が「珪化」と呼んでいるのは、地下において高熱の温水にさらされた結果としての「珪化」（二酸化珪素化）を意味したもので、「珪化」作用を受けた「松倉山」の凝灰岩は通常の凝灰岩と異なり、ハンマーでたたくとカーンと高い音を立てるほどの硬さを有している。

「報告書」での記述に次のような箇所がある。

二、流紋凝灰岩 本岩ハ流紋岩質火山灰ノ水中ニ沈積シテ固結シタルモノニシテ、白色淡灰色淡黄褐色ヲ呈シ粗糙ニシテ脆弱ナルモノト緻密ニシテ堅実ナルモノトアリ、往々稍粗大ナル流紋岩ノ碎屑ヲ混有シ、又肉眼ニテ認視スルヲ得ヘキ石英粒ヲ散布ス、本岩ハ西部丘陵地ノ大部分ヲ形成シ豊沢川上流地ニ於テハ本層中所々ニ流紋岩ヲ露出ス、鉛大沢間ニ於テハ本凝灰岩ヲ採掘シ下シ沢石ト称シ竈ノ製作ニ利用ス、盛岡附近ニ於ケル滝沢石ト岩種及用途ヲ同フス、台

温泉地ニ於テハ其分解ニヨリテ生シタル白土ヲ以テ陶器ヲ製造ス、本岩ニハ温泉ノ作用ヲ受ケテ珪化シ頗ル堅硬トナリ頑トシテ風化ニ耐フルモノアリ志戸平、江釣子森、台温泉附近等ニ於テ好例ヲ見ル。

「流紋凝灰岩」がどのような経緯で「珪（珪）化」されるか、また「珪化流紋凝灰岩」とはどのようなものか賢治自身が説明しており、興味深い。稗貫郡における「珪化流紋凝灰岩」は「志戸平、江釣子森、台温泉附近等ニ於テ好例ヲ見ル」とされており、松倉山はその中の一つの「志度平」にある。この石は明治時代より「耐火粘土」として知られ、「明治九年 各府県金石試験記」（文部省）にも記載されている。

また、「報告書」とともに刊行された「岩手県稗貫郡主要部地質及土性略図」（『新校本宮沢賢治全集』第十四巻「雑纂」）を確認すると、松倉山のある一帯は、「 P_2 」とあり、「流紋凝灰岩」の「珪化部」と説明されていることが分かる。おそらく賢治の調査が生かされた結果である。現在松倉山が流紋岩の山と判断

されている点については、今後さらに調査を進める必要を感じている。

二 金山・銀山

堀尾青史著『年譜 宮沢賢治伝』（図書新聞双書、昭41）に、土性調査に伴い林業の調査を受け持った盛岡高等農林学校の林科助教授・小泉多三郎の聞き書きが紹介されている。どのエピソードも興味深いものだが、そのなかの一つに、「金」「銀」に関する話がある。

大沢温泉に第一夜をあかし、鉛を半分こえた時でした。宮沢は、私に特にかかせるというでもなく、何かひとりごとを言いながら道を歩いているのです。考え考え、頭の中にあるものをまとめているといった調子で、「この谷のこち側には金、こち側には銀、ここには鉄があります——。」などと言っているのです。学問的なカンをひらめかしながら、その辺の地質を見透すようにやっ

いるのです。

「鉛を半分こえた」地点といった場合、賢治のいう「谷」とはどれを指すのだろうか。「鉛を半分こえた」地点に「谷」とよべるほどの場所はない。〈鉛〉を越えて少し行ったところならば、北東から〈東ノ又沢〉が流れ込んでくる。その場合は男助層か矢櫃層（湯口層）となる、鉛付近の西側ならば大荒沢層（幕館層）となるだろう。〈鉛〉付近で鉾山があったという記録はなく、また、詳しい現地調査もできておらず、現時点で確定的なことは何もいうことができない。ただ、岩田安正氏（前宮沢賢治イーハトーブ館副館長）の情報で、松倉山を地元では銀山と呼ぶことのあることを知った。先に紹介した賢治のエピソードとの関連もあり、今回少し詳しく調査することになった。その過程で、松倉山は金山として稼働していた時期のあることも確かめることができた。かなり、信憑性のあることなので、記録として残しておきたい。

松倉山は矢櫃層に属す矢櫃層は台温泉からさらに北方にかけ広がる凝灰岩を中心とした地層である。

畠山幸三郎さん（前出）のお話では、小さい頃から松倉山を銀山と呼んでいたそうである。松倉山は畠山さんの家の目と鼻の先にそびえる山である。畠山さんは明治生まれの父親から「あの山は銀が採れる」と聞かされていたそうである。おそらく、昭和以前、大正期か明治期から銀が掘られていたのではないかとおっしゃっていた。坑口は山の中腹にあるとのことである（写真18）。畠山さんの記憶でも、時折、銀を掘りに来る人がいて、地元の主婦を数人雇い、掘り出した鉾石を鉄の臼で細かく砕き、水を流した樋を使って銀をより分けるということである。それが四合瓶いっぱいになったところで帰っていくのだそうである。会社組織での大がかりな採掘はなかったようだ。

畠山さんの証言に、多少検証の余地がないわけではない。銀の採掘の場合自然銀としての産出はあまり考えられず、多くは硫黄との化合物として産出する。また、方鉛鉱などに含まれて一緒に産出することが多い。つまり、銀の採取には精錬の作業が加わるわけで、その点のお話を伺うことができなかった。お話の感じでは、山金の採掘のようでもある。当日は天候の関係で

坑口まで登ることができず、銀鉱石も入手していないので、断定的な結論は避けなければならないだろう。

金山についてはあるが、こちらは松倉山の地主さんである畠山勲さん（大正一三年生まれ）から伺った話である。昭和三〇年から三五年くらいのこと、日鉄釜石鉱業所から技師が来て、金の採掘を目的に坑道を松倉山に七本掘ったそうである。横に掘り進め、深いもので一三〇ほどあったとのこと。釜石鉱業所の所長である今井さんという方の一級先輩に金を探す山師がいて、採掘を勧めたそうである。畠山さんに金の鉱石をお持ちかたずねたところ、軒下にある石を持ってこられた。それが金の鉱石で、以前は肉眼で確認できる大きさの金が付着していたとのことであった。箔のように付着している金もあったとのことである。付近に鉱石の欠けた一部があったので頂戴できないかお願いすると快く分けていただくことができた（写真19）。ルーペを使って観察してみたが、残念ながら金の存在は確認できなかった。おそらく、マグマの熱水が滲入してできた鉱床と考えられる。金鉱脈は一メートルほどの中で、掘り進めるにしたがい、細くなつ

たりまた太くなったりするそうである。現在坑口は安全のためすべて塞がれているそうだ。当時、金鉱石を砕くために使われたという鉄製の臼と杵を見せていただいた。（写真20）。

また、昭和初期の頃、松倉山の裏手に松沢鉱山という金山があったということである。江釣子森山側から松倉山に向けて掘っていたという記憶を教えていただいた。同時期の記憶として、「天ヶ森」（賢治の「地質調査ルートマップ」）に含まれている山名）の麓にも鉱山があり、金も掘り出していたそうである。

さて、賢治が小泉助教に独り言のように語った「金」「銀」「鉄」の話だが、単なる当て推量なのか、それとも、具体的な地学的根拠に基づいていることだったのか、可能な範囲で推測してみたい。

「江尻断層」のある現在の西和賀町は、かつて金・銀・銅などを多産した地域で、大正期にはすでに数多くの鉱山が開かれていた。大荒沢層や大石層と呼ばれる地域で、それは賢治が歩いていた豊沢川流域にも続いている地層である。賢治の作品にも具体的記述を見ることができ。詩「甲助 今朝まだくらあに」

（『春と修羅』第三集）に記される「綱取」は和賀仙人鉱山の近くの綱取鉱山のこと、当時盛んに金銀銅などを産出していた。金・銀ではないが、「〔地質調査ルートマップ〕」との地域的関わりでいえば、三ツ沢鉱山（銅）や鶯沢鉱山（硫黄）など重要な鉱山が近くで稼動している事実も見のがすことができないだろう。また、現在の豊沢ダムの上あたりにある桂沢の沢口付近には桂沢金山があり、賢治の詩「〔廃坑〕」の下書き原稿の余白に、メモとしてだがその名が記されている。

このような大正期の鉱山の活発な稼動状況を前提に、さらに、今回の聞き取り調査で見えてきた、松倉山での金または銀の採掘、そして松沢鉱山や天ヶ森鉱山といった確実に昭和初期まで遡ることのできる金の採掘の歴史といった条件を考慮するならば、おそらく賢治は、それなりの鉱山学的な知識と根拠をもったうえで、小泉助教授に「金」「銀」「鉄」のことを語った、と推定することが妥当なのではないだろうか。今後同地域の調査をさらに進めていきたいと考える。

（了）



写真1 安山岩



写真2 礫岩質の凝灰岩



写真3 流紋岩



写真4 そろばん玉型球顆流紋岩



写真5 浮石質の凝灰岩



写真6 流紋岩

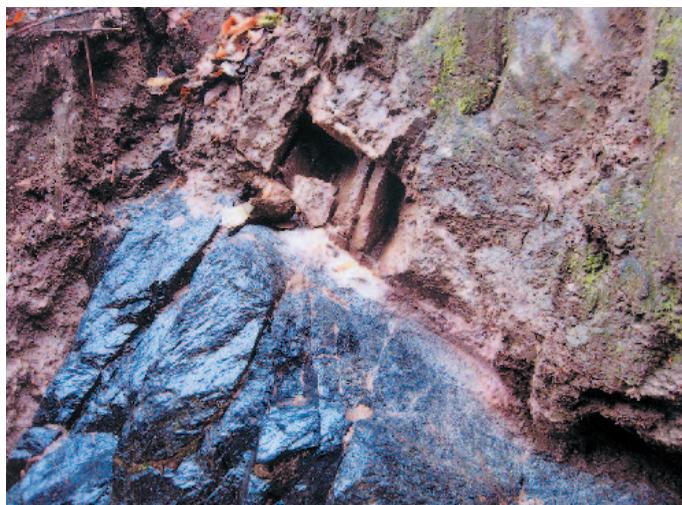


写真7 真球岩または黒曜岩の露頭



写真8 真球岩または黒曜岩の転石



写真9 空隙中に確認できる玉随（白い帯状のもの）

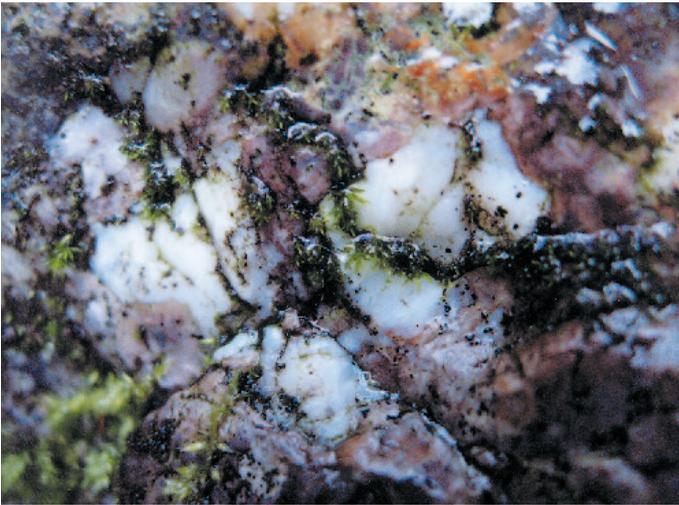


写真10 流紋岩転石中の蛋白石



写真11 渡橋から松倉山を眺む



写真12 五間ヶ森を眺む



写真13 横から見た松倉山



写真14 珪化流紋凝灰岩



写真15 珪化流紋凝灰岩



写真16 無数に亀裂の入った岩塊



写真17 空隙に発達した水晶群

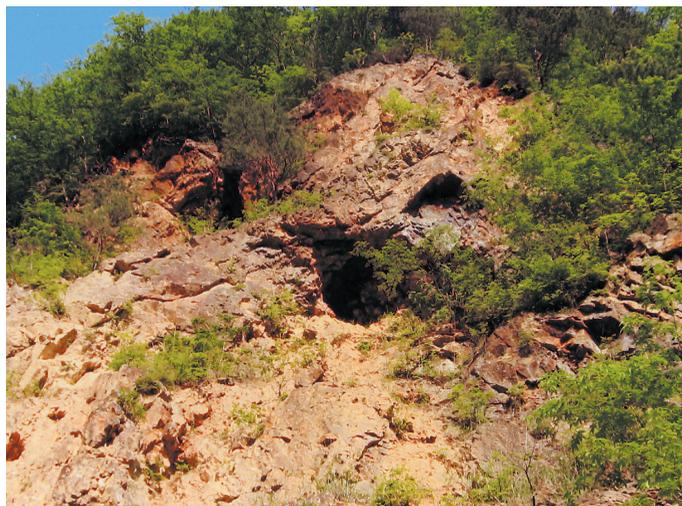


写真18 中央部穴が坑口



写真19 金鉱石



写真20 鉄製の臼と杵